

佳作

「私の未来は、なに色？」

―雲心月性の気持ちを持って―

愛知県立半田商業高等学校3年

三尾 菜 月

赤、青、黄。どれも鮮やかで、誰かに自分の色として言われればうれしい色だと思う。少なくとも暗いイメージを与える黒や、個性がないように見える白よりは断然未来の色として思い浮かべていい。しかし、私の未来の色は灰色でありたい。もっと言えば白寄りであるパールグレイ。一見灰色というのには良いイメージが浮かばない人は多いと思う。医療の道を目指している私にとって、無難に白や黄ではないのかと友人に問われたが、私は断固として灰色になるのだと胸を張りたい。

高校三年生一学期終了間際。私は姉の誘いで介護福祉士のアルバイトを始めた。理学療法士を目指している私にとって悪い話ではなく、また、介護福祉の仕事に興味があったからだ。人手が足りないこともあり、面接をして数日後すぐに出勤が決まった。初めてのアルバイトかつ、普通では体験できない介護職の現場に私は興奮を隠しきれずにいた。普通の高

校生は介護のアルバイトなんてやらないだろう、私は今から他人とは違う世界を体験するのだ。所詮テレビの世界でしか介護施設の現状を知らない私は、そう有頂天な思考を持っていた。

結論から言うと、私は地獄のような世界を目の当たりにした。地獄という言葉は語弊があるかもしれないが、私が想像し膨らませていた世界とはかけ離れていたのだ。テレビでよく見る、ふらつきながらもトイレへ歩いて向かう利用者は少なく、車椅子に腰かけ自分の尿意すら気付けず服やシーツを汚してしまう利用者。耳が遠いながらも話をしあえる利用者など殆どおらず、どんなに説得しても反応を見せない人や同じことを繰り返し話す利用者ばかり。中には社員同士で話し合っていると、それを自分の悪口を言っているのだと勘違いし怒鳴りだす人もいる。よくテレビで見る交流会で何かをしたり、リハビリを兼ねてゲームをしたり。そのような交流会は現実では一カ月に一、二回ほどあるかないかであった。これが介護施設の現状だ。あまりにも想像していた世界とはかけ離れていて、このアルバイトを本当に続けられるのか私は確証が持てなくなつた。今思えば、あの頃私がアルバイトを辞めず今現在でも続けられているのは、怖いもの見たさと医療への好奇心が不安よりも勝っていたからに違いない。

介護のアルバイトを続けて一カ月と少しが経ったある日。

私はある女性の利用者に酷く汚い言葉で暴言を吐かれた。私を「旦那の愛人」と勘違いしているようだ。その日一日、彼女は私からの介助をすべて拒否し、視界に映ることすら煙たがった。昼食のパンをちぎって投げつけてきた時は、思わず怒鳴りそうになった。苛立ちからではない。酷く悲しい気持ちで湧いてきたのだ。他の社員は私を憐れみ、気にしないでいいよと慰めの声を掛けてくれた。私はその言葉に頷いたが、それで納得できたかと問われれば、答えはいいえであった。よく「人の痛みをわかる人間になりなさい」と言う言葉を耳にする。心掛けてはいても、実際はとてつもなく難しい話だ。人それぞれ感じ方は違い、また痛みの大きさも個人差がある。それを理解できるのは本当に心の優しい人間か、同じ痛みを受けた人だけだ。私は自分が優しくない人間だというのは自負しているし、同じ痛みを受けているわけでもない。それでも彼女が私を傷付けることで痛みを訴えているのだと思うと、心を痛ませずにはいられなかった。

病院やナースを白色だと思うのは、清楚、清らか、癒やしなどを連想させるからだそうだ。確かに頭の中で病院を想像してみれば、あの独特な消毒液の匂いととも白色の世界が映し出される。病院も救急車も医務服も、治療は白色を連想させるのだ。では、その逆である黒色はどうだろうか。医療を白で表すのなら黒色は病気や障害と例えてもいいのではな

いだろうか。汚れを落とすように、医療によって黒色が白色へ変わっているのではないだろうか。仮にそうだというのなら、私はその真ん中の色でありたい。ただただ目の前にいる患者様を治すのではなく、少しでも黒色の部分を分かち合い、支えてあげたい。医療の立場でありながら、患者様の気持ちに分かる優しい理学療法士になりたいのだ。それは決して簡単なことではなく、先程話したように人の痛みを理解するのはとても難しい。ただ、難しいだけであって不可能ではない。何かしらの行動に出る勇気さえあれば分かち合えることもある。現に、未だ私を夫の愛人と勘違いしている彼女は、私に怒鳴るだけ怒鳴れば至極穏やかになった。自分さえ我慢すれば相手は満足できる、などとそんな善人な考えは持っていない。理不尽に怒られれば苛立つし、馬鹿にされれば見返したくなる。それでも誰かが膝を抱えて泣いているのなら、共に涙を流せる人になりたい。人の痛みがわかる人。人の痛みを共感できる色。私は将来、そんな色になりたい。